

第36回 企画展

近代阿波の養蚕

— 藍から繭へ —

〔展示期間〕 平成21年1月27日(火)～4月26日(日)

〔開館時間〕 午前9時30分～午後5時

〔と　こ　ろ〕 徳島県立文書館 2階 展示室

●展示解説 平成21年3月1日(日)・4月5日(日) 午後1時30分～午後3時
徳島県立文書館 2階 講座室・展示室

入場
無料



文化の森総合公園 徳島県立文書館
Tokushima Prefectural Archives

阿波の蚕業（養蚕・製糸）概観

■前近代

美しい光沢としなやかな手触りをもつ絹は、日本だけでなく世界中の人びとに親しまれてきた繊維の王様である。繭から絹をつくる歴史は古く、古代中国に始まったといわれている。中国から西洋に運ぶシルクロード（絹の道）

は歴史的に名高いが、日本にも弥生時代には稲作と共に絹をつくる技術が中国から伝来し各地に伝播したことが考古学的な発掘から明らかになっている。「魏志倭人伝」や「古事記」「日本書紀」にも蚕や絹が記載されており、奈良時代においても、絹や「あしぎぬ」は、「調」（税）の対象とされていた。平安時代の「延喜式」には、阿波が上糸国（一二方国）のひとつとして位置づけられている。

木綿が庶民の衣料用として普及する近世以前は、絹や麻が衣料の主体であり、生糸も全国各地で産出した。しかし品質は悪く、高級な織物の材料は中国産の輸入白糸に頼っていた。江戸時代になって中国産の輸入生糸の統制をはかった「糸割符制度」が実施され、国内の生糸生産が発展した。諸藩は養蚕を奨励し、技術改良（蚕飼育・蚕種・栽桑法）が進み、製糸や絹織物業も各地で発達した。江戸中期には輸入生糸を駆逐するに至り、幕末の開港後、輸出に転じた。

■近代

近代になってから明治政府は富国強

兵をはかるため、殖産興業をスローガンとし、生糸に着目して外貨獲得のため製糸業の育成に取り組んだ。やがて、生糸は輸出品の三分の一を占めるまでの最重要産物に成長して、近代日本の産業経済を支えるに至った。

徳島でも、明治二（一八六九）年徳島藩にはじめて物産係が置かれ丹後より真名井純一を招聘し、蚕業指導を行わせた。蜂須賀家も養蚕・製糸のため出資し蚕業振興に尽力した。

明治中期以降、基幹産業として近世の繁栄を支えた阿波藍が次第に衰退はじめると、藍作からの経営転換が模索されはじめ、農業用水建設による水田化が現実化していった。もう一つの代替産業として注目されたのが蚕糸業である。藍作経営を養蚕経営に転換させようとして藍商たちは競って養蚕に乗じだし、県は養蚕の指導や学校教育などの蚕業振興策の充実をはかり蚕糸業は発展していった。

大正期には蚕品種改良が盛んとなり交雑種（一代雑種）が普及して養蚕の近代化が進んだ。藍作の中心地であった吉野川流域の沖積平野から阿讃の洪積扇状地にかけて、それまでの藍畑は桑園に大きく姿を変えていったのである。

同時に、生産された繭をもとに製糸業が勃興し、藍から製糸への転換をはかろうとする藍商資本の進出により製糸場が続々と起業されていった。また蚕種を専門に扱う蚕種製造事業も乗り出した。

昭和初期には、徳島県の耕地面積の二割に達する約一万町歩、桑の栽培戸数は県内農家の約半数を占める約四万戸、産繭量は約九千トン、売上げ価格は水稲に次ぐという一大産業に成長し、農家の副業としてもしつかりと地域に定着していった。

徳島県は、主産地である東日本の諸県にはおよばないが、肥沃な吉野川沖積平野で栽培された桑による養蚕は、全国屈指の反当たり取繭量を誇り、西日本では有数の養蚕県に成長した。

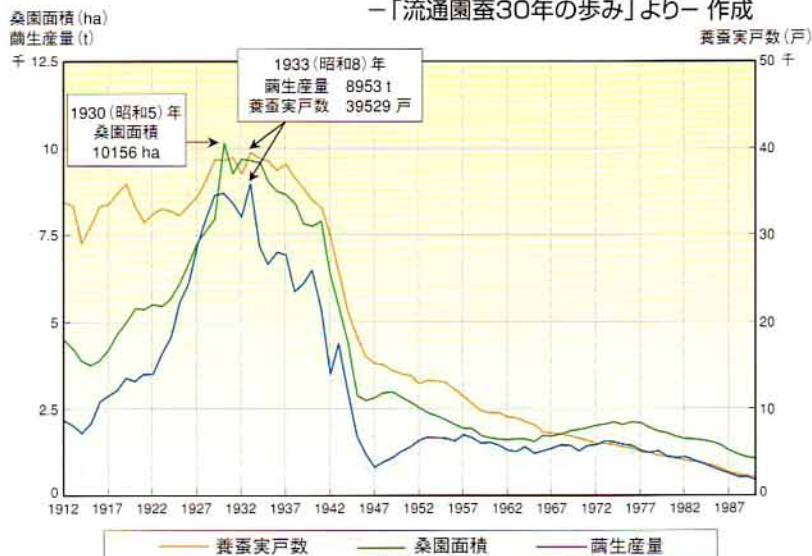
しかし昭和初期に頂点をむかえたこの蚕糸業も、最大の輸出先であったアメリカ市場が世界恐慌によって生糸価格が大暴落すると、大きな打撃をうけた。その後も日中戦争から太平洋戦争への拡大とともに食糧増産のため桑園は転換と縮小を余儀なくされた。

戦後の養蚕は、復興する農業のホープとして期待され、蚕業振興策も功を奏して昭和三二（一九五七）年には繭生産量が約一八〇〇トンと戦後のピークを迎えた。しかし、ナイロン

など化学繊維の普及、安価な中国産生糸の輸入、繭価格の低迷、農山村の高齢化など、養蚕経営の基盤を脅かす相次ぐ状況変化により養蚕業は次第に衰退し、現在では壊滅に近い衰退を余儀なくされている。

養蚕の衰退にともない製糸業も衰微し、昭和六一（一九八六）年には本県唯一の器械製糸である筒井製糸も閉鎖されるに至り、全国的にも衰退の一途をたどっている。

■桑園面積・繭生産量・養蚕実戸数の変遷
—「流通園蚕30年の歩み」より— 作成



ごあいさつ

県の公文書は、職員が県民の生活に則し、職務を遂行するために作成した文書です。したがってその時代を生きた県民の生活に即した記録といえます。今回は徳島県の公文書を中心に近代阿波の養蚕業・製糸業について概観する展示といたします。

養蚕・製糸は明治から昭和初期にかけて日本の外貨獲得の花形輸出産業として発展しました。徳島においても明治中期以後、吉野川流域をはじめ県内各地に桑が植えられ、養蚕が行われました。また、鴨島をはじめ製糸工場も各地に造られ、高品位の生糸生産が行われました。

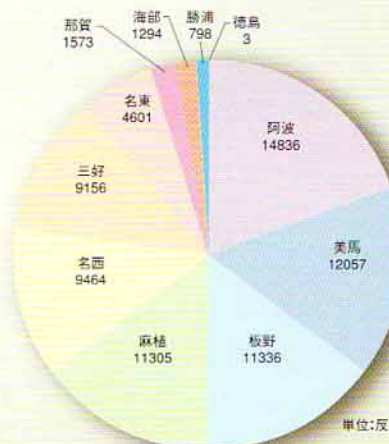
今回は徳島の近代の養蚕・製糸の歴史を概観するとともに、養蚕振興の政策や教育、製糸工場のような公文書や写真で紹介いたします。さらに、桑や蚕、繭、糸繰りを体験してもらっている方々が少なくなりましたので、養蚕や製糸の過程を写真や現物、映像資料などを使って紹介いたします。

徳島県における養蚕・製糸の歴史についての体系的な研究はまだ十分とはいえません。この展示を契機に徳島県の養蚕・製糸の歴史研究が緒に就くことを期待したいと思います。また、これらを検証する公文書の保存・整理の大切さを考える機会といたします。

この展示の開催にあたり、桜木武敏氏 片保正昭氏 川村泰史氏 山野耕治氏 筒井直典氏 川真田覚氏 高田牧子氏をはじめ数多くの方々のご協力をいただきました。末尾ながらお礼申し上げます。

平成二十一年一月二十七日

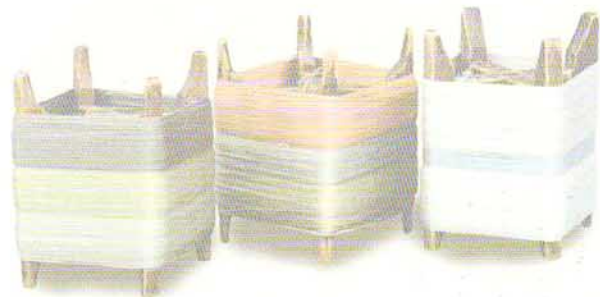
徳島県立文書館長 計盛真一朗



■ 桑園都市別グラフ
— 昭和3年「徳島県之蚕糸業」より —



桑を食べる蚕 — 川村泰史氏 提供 —



養蚕振興と教育

— 板野郡立蚕業学校・名西郡立蚕業伝習所 —

養蚕業の振興と技術向上のため、明治中頃になると県内各地に養蚕伝習所が設けられ、それらを発展させた養蚕学校も設立されるようになった。

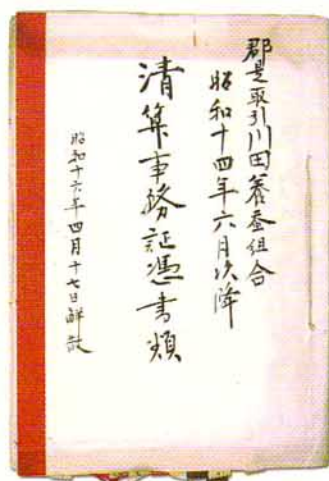
明治三九（一九〇六）年設立の板野郡立蚕業学校もその一つで、養蚕に関する実習と実験中心の授業が行われた。やがて農業一般に対する教育と普通教育を重視するようになり、農蚕学校と改称。実業女学校も付設され、健全な農村民・農村婦人の育成を目指した。また戦時中には軍事教練も行われるなど、時代と共に姿を変えながら地域の教育の拠点として存在した。明治三六（一九〇三）年設立の名西郡立蚕業伝習所も、郡立農蚕学校・実業女学校となり、大正一二（一九二三）年に県立名西高等女学校となって、こちらは女子教育における発展をみせた。この二つの学校は、戦後、それぞれ県立の板野高校・名西高校となって現在に至る。今に残る学校の中に、その出発点が養蚕教育にあったものがあることは、養蚕がいかに盛んで重要視されていたか伺えよう。



名西郡立蚕業伝習所的女子学生

特約養蚕組合

— 郡是正量取引川田養蚕組合 —



郡是正量取引川田養蚕組合
清算事務証憑書類

大正から昭和初にかけて、統一された優秀な原料繭の確保を急務としていた郡是（現グンゼ）や片倉などの大手製糸会社は、蚕種の提供や技術指導などをテコとする特約取引によって各地の養蚕組合を組織していった。このような特約養蚕組合として大正一四（一九二五）年に麻植郡川田村（現吉野川市）に設立されたのが「郡是正量取引川田養蚕組合」である。県北の養蚕地帯の中央に位置する川田村には大正一一（一九二二）年に郡是により乾繭場も建設されており、昭和一〇（一九三五）年末時点で徳島・香川両県の一五七の養蚕組合との取引が確認されている。

この時期の特約取引については、製糸会社側が蚕種の決定権などを掌握していたことから養蚕側に不利な点が多かった。そこで、地区単位の養蚕実行組合の法人化と系統上級団体の結成（一九三二年の蚕糸業組合法）、道府県の繭検定所による繭検定制度の導入（一九三六年の産繭処理統制法）などの施策が講じられ、特約取引の欠陥も是正されていった。このような流れの中で、郡是正量取引川田養蚕組合も昭和一六（一九四一）年に発展的に解散することとなった。

近世・明治初期の養蚕

■徳島藩の養蚕

文化二（一八〇五）年に藩の儒者佐野之憲が編纂した『阿波志』は各郡の特産物を紹介している。板野・麻植・美馬・那賀の四郡ともに繭綿が登場する。繭綿とは真綿のことであろう。真綿とは繭から引き伸ばして取る柔らかくて軽い綿で、着物などに入れた。

『藩法集』によると、藩は元禄一六（一七〇三）年・享保四（一七一九）年に、①検地はずれの空地や野原・道縁に桑を植えよ②糸繭蚕を飼育せよと命じて養蚕を奨励し、役人を農村へ派遣して徹底をはかっている。田畑以外の土地からも収入を求めようとした藩の政策がどのような成果をあげたのかは不明であるが、右の四郡を中心とした農家で真綿が生産され、その一部は藩や給人に税として徴収された。板野郡竹瀬村（藍住町）では、享和二（一八〇二）年「西尾源十郎様夫銀桑綿取立帳」（キノウ〇〇八二四）によると「桑綿老奴 久右衛門」とあるように、桑綿（これも真綿であろう）を現物で三九人の百姓が合計二八四四分三厘を給人西尾源十郎に収めている。



桑綿取立帳

■真名井純一と養蚕

明治二（一八六九）年、徳島藩は物産掛に栽桑科を置き、養蚕の先進地丹後国岩滝村（京都府）から真名井純一を招聘する。名西郡高畑・海部郡大里・名東郡富田浦に模範桑園、徳島城西の丸には桑苗繁殖場を開設した。開国以来輸出の主力となっている蚕種・生糸に注目したのである。こうして真綿中心の養蚕は蚕種・生糸生産のための養蚕へと転換するのである。明治四年の廃藩置県後、蜂須賀家は新蔵町の旧藩邸に養蚕室・製糸場などを置き、士族授産事業として明治九年まで養蚕経営をおこなった（『徳島縣之蠶絲業』による）。

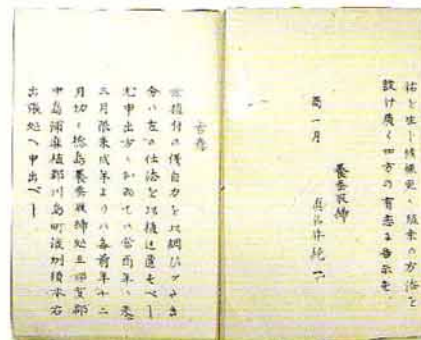
■名東県の養蚕奨励

明治五（一八七二）年十一月、名東県参事の久保断三は木版の「県内告諭」（ツユク〇〇二38）を出している。「国民たる者は、牧畜と養蚕という富国の方策を直ちに実行すべきである。それにより、国民を繁富にし、国家を強盛にする基礎を樹立できる」というもので、明治政府が進める富国強兵・殖産興業政策を反映した内容である。同月二七日の県布達二一七号では、野原など無税地に桑植付けが進まないことに対し、「養蚕の利益を理解しない頑迷の者には区長・戸長・用掛が説諭すべきである。また、税負担の名負地で植付けを望む者には、養蚕取締が良種の桑苗を配布し、栽培方法を指導する」と苛立ちをみせている。

明治六（一八七三）年一月、養蚕取締の真名井純一は告諭と布達をふまえた木版の告示（ツユク〇〇二74）を出し、桑植付けの質問があれば徳島養蚕取締所、那賀郡中島浦・麻植郡川島町・淡州須本の出張所に問い合わせるよう述べた上で、植付けの手順を三項目にわたって説明している。

明治八（一八七五）年二月九日、蚕種副総代の真名井純一は、県権令古賀定雄から「病氣二付、依頼免役申付」（県布達三三三号）られている。その後の真名井は「名東県歴史」によると、同年八月に阿波国徳島組と讃岐国象山組が共同で設立した養蚕会社の総代に就任する。しかし、翌年一月二日に「徳島組蚕種製造ノ義、昨年来製種不都合ニヨリ本年一月休業御届」、七月一三日に徳島組は「何分後来目途難相立旨ニテ別紙ノ通廢業願出」を提出するのである。

明治七、八年は、横浜港を中心とする開港場の蚕種景気が悪化したようである。徳島組の廃業もその余波を受けたものと思われる。明治初期は阿波藍業がまだまだ活況を呈している時期であり、名東県が期待したように養蚕は発展しなかった。近代阿波の養蚕が再出発するのは明治二〇年前後の頃からであった。



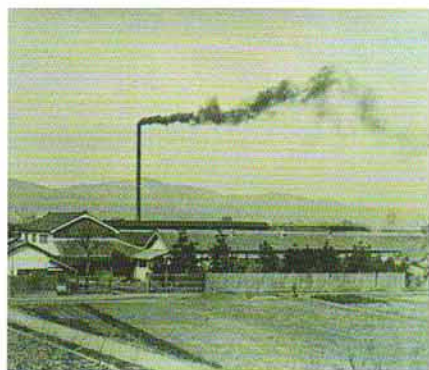
真名井純一の告示



県内告諭

出典：『京都朝日』(昭6)・『筒井製糸株式会社協町工場』他

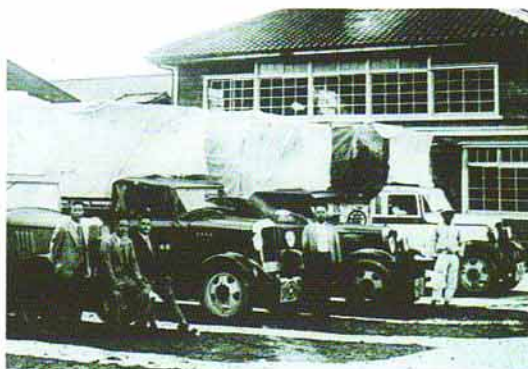
写真で見る 徳島の製糸業



煙突は製糸工場のシンボル(笠井製糸)



勢揃いした片倉製糸の全職員(鶴島製糸場)



工場に集荷された原料繭(筒井製糸)



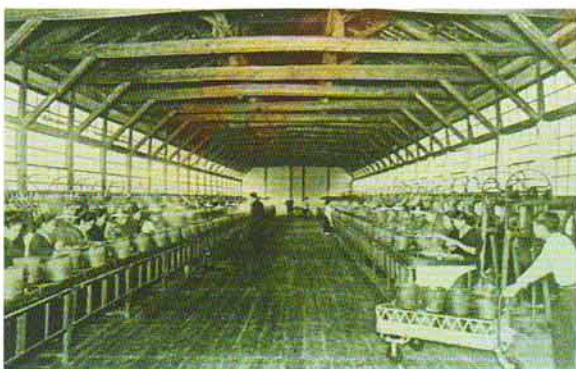
工場で働く「工女」さん(筒井製糸)



出荷を待つ回転簇の繭(片倉製糸)



村での繭の購入(筒井製糸)



整然と並ぶ繰糸機



協町工場の食堂風景(筒井製糸)

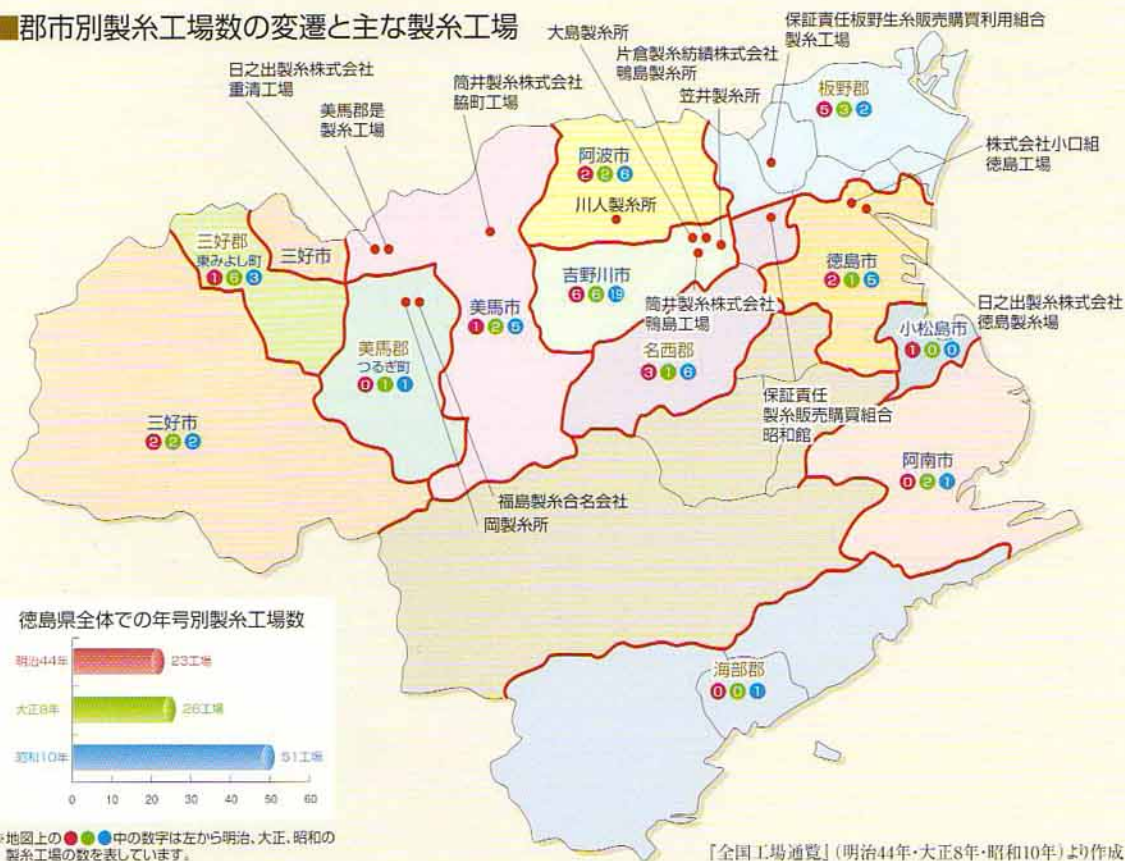
公文書で見る徳島の製糸業

明治一九（一八八六）年徳島県は徳島市新蔵町に「県立蚕糸伝習所」を設立し、そのとき生産した四箱の生糸を輸出した。これが、徳島における伝統的な座繰製糸ではない、本格的な製糸生産の始まりである。同二（一八八八）年には伝習所に五馬力の製糸器械が導入され、民間の製糸業参入が始まるなどしたが、同二三年には伝習所が廃止となり、同二五年の糸価暴落などによってその動きは一時止まった。同三四年麻植郡川島町にて一〇〇釜の製糸器械を持つ阿波製糸株式会社が設立したが、同四一年には解散してしまう。このように器械製糸業はなかなか徳島に根付かず生産された繭の多くは県外に移出されていた。一方、同年鴨島町に県外資本の片倉製糸紡績会社（長野県資本）、徳島市島田に小口組徳島製糸場（長野県資本）などの大規模工場の徳島への進出があり、地元資本の小工場も建ち、ようやく根付きはじめる。その後、第一次世界大戦の影響により徳島においても製糸業は大正六（一九一七）年頃から飛躍的に発達することになる。様々な経済的な要因を受けながら、昭和初期に最盛期を迎えた。

戦後徳島県農政蚕糸課の作成した公文書の中に「製糸業免許台帳」がある。これは器械製糸・座繰製糸の両業種は、製糸業法（一九三二年九月公布、一九四七年改正、一九九八年四月廃止）による免許を必要としたため、工場設立の際に必ず申請書を提出していた。戦前の最盛期の徳島における製糸業の実態を見ることのできる資料である。この台帳には五八の製糸工場が搭載されているが、一〇〇釜を越える工場は七つ（片倉製糸、筒井製糸（鴨島）、筒井製糸（脇町）、小口組、日之出製糸、昭和館、川人製糸所）であり、多くは一〇釜に満たない小規模の個人工場であったことがわかる。このうち昭和館は、正式には「保証責任生糸購買販売利用組合昭和館」といい名西郡石井町地域の養蚕農家が作った産業組合による工場である。こうした養蚕農家の産業組合による工場は板野郡西部にも作られた。

これらの工場も戦争が進むにつれて事業を廃止したり、軍需工場への転用が進んだ。ついには昭和一八（一八八五）年国策会社である日本蚕糸製造株式会社が残りになった。戦後、この国策会社は解体し、各工場は再設置され、生産の効率化・集約化が図られることになるが、戦前の水準に戻ることはなかった。

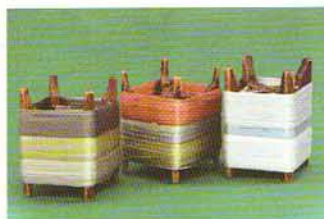
■ 郡市別製糸工場数の変遷と主な製糸工場



展示資料一覧

No.	表 題	年 代	備 考
藍から繭へ 養蚕			
1	繭	平成期	県農業研究所
2	絹反物	平成期	山野耕治蔵
3	富桑図(掛軸)	年代不詳	山野耕治蔵
4	養蚕一覧	昭和9(1934)年	桜木武敏蔵
5	和紙人形「おかいこさん」(河野操作)写真集	平成7(1995)年	山野耕治蔵
6	浮世絵「歌麿筆女織蚕手業草図」写真	江戸期	桜木武敏蔵
阿波のシルク 製糸について			
7	生糸・真綿	平成期	県農業研究所
8	生糸商標ラベル	戦前・戦後昭和期	桜木武敏蔵
9	繭検定行程表	戦後昭和期	桜木武敏蔵
10	徳島県原蚕種製造所写真(「東宮行啓記念写真帳」)	大正11(1922)年	文書館所蔵図書
11	徳島県繭検定所改築工事設計図	昭和14(1939)年	県農業研究所公文書
近世・明治初期の養蚕			
12	覚(当夏受銀桑綿銀受取の件)	文政4(1821)年	アキ01072
13	奉申上(桑苗下渡し願)	明治5(1872)年	ミヅ00851
14	県内告諭(牧畜養蚕の勧め)	明治5(1872)年	ワヅ00238
15	養蚕の儀二付(養蚕告諭につき桑植付方告示)	明治6(1873)年	ワヅ00274
16	西尾源十郎様夫銀桑綿取立帳(竹瀬村)	享和2(1802)年	キヲ00824
養蚕振興と教育			
17	蚕体解剖学新教科書	昭和6(1931)年	ワヅ02381
18	農業 下 高等女学校用(教科書)	昭和21(1946)年	文書館所蔵図書
19	蚕業学校建設工事執行方ノ件	明治39(1906)年	シノ02180
20	寄附物件受理に関する説明(郡立蚕業学校設立の件)	明治39(1906)年	シノ02173
21	栄村養蚕巡回教師(雇い入れの件)	明治38(1905)年	シノ02161
特約養蚕組合			
22	陳情書(川田乾燥場区域内に繰糸工場設置の件)	昭和2(1927)年	カミ00194
23	郡是取引川田養蚕組合 清算事務証憑書類	昭和14(1939)年	カミ00210
24	急告(肥料値上げ通知他)	昭和7(1932)年	イヅ00164
蚕種の製造			
25	蚕糸の光	昭和11(1936)年	山野耕治蔵
26	生糸の国	昭和10(1935)年	山野耕治蔵
27	阿波蚕報	昭和9(1934)年	山野耕治蔵
28	蚕糸界報	昭和7(1932)年	山野耕治蔵
29	昭和九年秋同拾年春期沖繩報告綴	昭和9(1934)年	山野耕治蔵
30	昭和九年春各分場上蒞報告	昭和9(1934)年	山野耕治蔵
徳島での製糸業			
31	製糸業免許台帳	明治～昭和30年代	県農業研究所公文書
32	製糸業法関係書類	昭和16～29 (1941～54)年	県農政蚕糸課公文書
県蚕糸試験場の公文書			
33	講習生関係書類綴(徳島県原蚕種製造所)	大正10(1921)年	県農業研究所公文書
34	徳島県原蚕種製造所桑園写真帳	大正10(1921)年頃	県農業研究所公文書
35	講習生関係書類(徳島県蚕業試験場)	大正14(1925)年	県農業研究所公文書
36	徳島県蚕糸業統計(徳島県)	昭和28(1953)年～	県農業研究所公文書

※資料保存のため展示品の一部を替えることがあります。



印刷

ナカカワ・アド株式会社

〒760-8563 徳島県徳島市南町三丁目
電話 〇八八(六六八)三七〇〇
〇八八(三二五)一六四三

編集・発行

徳島県立文書館

〒760-8563 徳島市八万町向寺山
電話 〇八八(六六八)三六〇〇

第三十六回 企画展
近代阿波の養蚕 ― 藍から繭へ ―
平成二十一年一月二十三日発行